フィールドで考える

墓の手入れに行く日

松井生子（まついなるこ）
民博 外来研究員

舟を降りて土手に上がると、そこは一面、黄金に色づいた稲田だった。稲田のなかにはコンクリートで区切られた一画があり、立派な門が立っている。そこが、わたしたちがめざす墓だった。

陰暦一二月二〇日の墓の手入れ

ここはカンボジアのプレイ・ヴェン州南部。ベトナムとカンボジアの国境に近く、内戦前からベトナム人が多いところである。わたしはこの地域の、メコン河沿いの村で調査をおこなっている。

毎年陰暦一二月二〇日、調査地とその周辺の村々に住むベトナム人は墓の手入れに行く。わたしはこの日、友人の父親であるタムおじさんに誘われて、調査地の東にある「小さな河」とよばれる河のほとりに来ていた。

ふたつの河川が流れるこの一帯では、雨季に河の氾濫で土地の大部分が水に沈んでしまう。乾季に入って水が引き、陰暦の新年節を前にしたこの日に、墓で草むしりをし、土饅頭（どまんじゅう）に土を盛り直すことが彼らの慣（なら）わしである。

「小さな河」沿いのベトナム人の家

タムおじさんとわたしが立ち寄った「小さな河」沿いの集落でも、家屋の脇や裏手にある墓で人びとがそれらの作業をおこなっていた。おじさんはこの集落に住む従兄と舟に乗り、そこからさらに川上の墓をめざした。彼らは父系を重視し、通常は父系祖先の墓の手入れをするのだが、この日向かったのはおじさんの母方祖父の墓だった。

内戦とベトナムへの移動を経て

カンボジアでは一九七〇年に内戦がはじまり、当時この地域の人口の大部分を占めていたベトナム人は戦火を逃れてベトナムへ避難した。一部の人びとは、強制労働や虐殺などがおこなわれたポル・ポト政権時代が一九七九年に終わった後にカンボジアに戻ったが、大多数はベトナムにとどまった。カンボジアに戻った人はその理由として、ベトナムでの生活が経済的にうまくいかなかったことを挙げることが多い。一九七九年以降のこの地域にはカンボジアの多数派民族であるクメール人が多数移入し、現在ベトナム人は少数派となっている。

「小さな河」沿岸の集落出身のタムおじさんもベトナムへの避難を経て一九八〇年代にカンボジアに戻ったが、親族の大半は今もベトナムに住んでいる。この日母方祖父の墓へ赴いたのは、本来その墓を管理しなければならない母方の親族がカンボジアにいないためである。

稲田の墓で作業をおこなう二人

稲田の墓に土を盛る

稲田のなかの墓

たどりついた稲田の墓は、冠水のあいだに盛土が流されてほぼ平坦になっていた。おじさんたちはナタで雑草を刈りとり、墓の敷地の端に置いた。次に土を掘って墓に盛り上げ、ナタとシャベルでたたいて固める。菓子と小さなグラスに注いだ酒をお供えし、線香を捧げた後、さらに土を盛る作業が続いた。

作業中に、近所に住んでいると思われるクメール人の若い男性が二人、墓まで歩いて来た。墓がつくられた時期を問う彼らに、タムおじさんは「五〇年以上前だよ」と気さくに答えていた。クメール人の小さな子どもたちもやって来て、おじさんが「お菓子だ」と、お供えした残りの菓子を渡した。

家に戻った後の語らい。右端の白いシャツの男性がタムおじさん

タムおじさんと従兄によって、墓にはこんもりと土が盛られた。彼らはその上に酒をかけ、帰途についた。墓がある場所は現在、クメール人の所有地となっている。おじさんは稲田のもち主に気を遣い、歩いたときに倒れた稲を立て直した。

隣国ベトナムにルーツをもつベトナム人は、カンボジアで「クメール人の領土を奪う」といわれ、しばしば社会の外部者であるかのように扱われる。しかしタムおじさんを含め、この地域出身のベトナム人は、自らがカンボジアに住むことの正当性を感じている。彼らがカンボジアに戻ったとき、内戦前までの所有地は既にクメール人に分配されていた。墓の大半はクメール人に耕されるなどしてなくなっており、タムおじさんの母方祖父の墓のように内戦前の墓が残っているケースは少ない。だが、現存する墓は、彼らが数世代にわたり、この地に根ざした生活を送ってきたことを示すものである。可能な限り続けられている墓の手入れは、幾多の変化のなかで、過去との連続性を維持しようとする行為のようにも思える。一方、墓でのタムおじさんの対応に見られるように、彼らはクメール人との対立を望んでいるわけではなく、穏健な関係を築いて生きていこうとしている。わたしがフィールドで出会ったのは、カンボジアで生きる、このようなベトナム人の姿だった。墓の手入れの後は従兄の家に戻って食事となり、たのしい団欒（だんらん）のひとときとなった。